

2020. 11. 15 第三主日あかし礼拝

詩篇 32 : 1-11 「赦される喜び」

聖書

- 1 幸いなことよ、その背きを赦され、罪をおおわれた人は。
- 2 幸いなことよ、主が咎をお認めにならず、その霊に欺きがない人は。
- 3 私が黙っていたとき、私の骨は疲れきり、私は一日中うめきました。
- 4 昼も夜も、御手が私の上に重くのしかかり、骨の髄さえ 夏の日照りで乾ききったからです。
- 5 私は自分の罪をあなたに知らせ、自分の咎を隠しませんでした。私は言いました。「私の背きを主に告白しよう」と。すると、あなたは私の罪のとがめを赦してくださいました。
- 6 それゆえ、敬虔な人はみな祈ります。あなたに向かって、あなたがおられるうちに。大水は濁流となっても、彼のところに届きません。
- 7 あなたは私の隠れ場。あなたは苦しみから私を守り、救いの歓声で私を囲んでくださいます。
- 8 私は、あなたが行く道で、あなたを教え、あなたを諭そう。あなたに目を留め、助言を与えよう。
- 9 あなたがたは、分別のない馬やらばのようであってはならない。くつわや手綱、そうした馬具で強いるのでなければ、それらは、あなたの近くには来ない。
- 10 悪しき者は心の痛みが多い。しかし、主に信頼する者は、恵みがその人を囲んでいる。
- 11 正しい者たち、主を喜び、楽しめ。すべて心の直ぐな人たちよ、喜びの声をあげよ。

はじめに

今日は旧約聖書の詩篇 32 篇に心を向けてみましょう。聖書は旧約 39 巻、新約 27 巻、併せて 66 巻の大小の書物が合わさったものです。大雑把にいう

と旧約聖書は律法の書、歴史書、知恵の書、預言書に分類され、新約聖書はキリストと教会の歴史、手紙、黙示録に分けることができます。この中の知恵の書の一つが詩篇です。詩篇は神さまとはどういう方なのか、また人間とはどういう者なのか、ヘブル的な表現で記されており、多くのクリスチャンたちに愛読されています。ヘブル人の感覚で書かれていますので、少し分りにくい面があるかもしれませんが、人の心の内を見事に表わしている点において、民族や言語を超えて多くの人の心を捉えています。詩篇には 150 の詩があるのですが、その中に 7 つの悔い改めの詩が納められています。今日はその一つである詩篇 32 篇を見てみましょう。

1.4 行の略歴

94 歳で亡くなったあるおじいさんの葬儀の式次第に略歴が記されています。このおじいさんには孫が 14 人、ひ孫が 13 人というたくさんのお孫さんたちがいまいましたので、恵まれた生涯をもって天寿を全うした幸いな人生だったといえるでしょう。94 年間ですから戦争も経験しておられます。たくさんのお孫さんが人生の中にあつたことなのでしょう。故人の略歴はたった 4 行でした。1 行目は誕生、2 行目は結婚、とんで 4 行目は死亡。多くの人の人生は、それが長くても短くても、この 3 つないしは 2 つ（結婚がない場合）で要約されるでしょう。このおじいさんの略歴には 3 行目がありました。85 歳のときのことです。それはイエス・キリストを救い主と信じた、ということでした。これは 94 年の生涯の中でもっとも大切なこと、そして幸いな出来事でした。おじいさんは若いときに聖書のお話を聞いたことがあつたようです。ですから神さまが存在するとしたら、創造主であり絶対者である神、秩序をもって治められる神、正しいことを曲げることのない神であることを理解していたようです。しかしそのときにはどのような事情があつたかわかりませんが、罪を悔い改めて信じるには至りませんでした。けれども晩年になって信仰をもってからは天国を待ち望む幸いを得ることができました。死はすべての人が行く道とあきらめるのではなく、自分を愛してくださった神様のもとに迎えられる喜びとなつたのです。

詩篇 32 篇はダビデが記したもので、冒頭にこのように書き記しました。「幸いなことよ その背きを赦され 罪をおおわれた人は。幸いなことよ 主が咎をお認めにならず その靈に欺きがない人は。」(1,2 節)。人とは人生の長さに関わらず、罪や咎と言われる負の歴史を背負っています。死に直面したとき、それをすべて赦されて平安の中で生涯を閉じる幸いをこの詩は表しています。クリスチャンとは、イエス・キリストの十字架の身代わりの死によって、罪が赦されたことを信じている人たちです。そのような人のことを聖書は「幸いな人」と呼んでいます。このおじいさんは 85 歳でイエス・キリストに出会い、「幸いな人」になりました。おじいさんはたくさんの幸いを積み重ねてきましたが、最も幸いだったことは生けるまことの神さまに出会い、神さまの御前に罪を赦され、永遠のいのちをいただいたことでした。

2. 神さまの徹底した赦し

神さまは私たちの背き、罪、咎を赦してくださるお方です。背きとは神さまへの反逆という強い意味です。神さまの教え（律法）を破ることです。この概念は日本人である私たちには分りにくいでしょう。なぜなら、聖書が言う神さまの教えを持たない民族だからです。とはいえ、私たちには良心が与えられています。律法を持たない者でも、その良心が律法の働きをするので、心が痛むとか良心の呵責ということばで表されるものがあるなら、それは広い意味において背きに当たるのです。罪とは的を外すとか道を踏み外すという意味です。神さまは私たちに祝福された人生を歩んで欲しいと願い、たくさんの恵みを注いでくださるお方です。ところが私たちは神さまの願いとは違う道を選び取ってしまい、結果人生の目的を見失ってしまうのです。これが罪です。多くの人が持つ一般的な罪の概念とは違うでしょう。咎は不義とも言われるもので、意図的でないにしても義務や節度から外れてしまう行為です。「誤って～をしてしまった」とか「不適切な対応」という表現で表されるものですが、それによって人を傷つけたりすればその責任を負わなければいけません。

神さまはこれらの人間の背き、罪、咎をすべて赦してくださるのです。しかもその赦しの程度が徹底しています。神さまの赦しは、赦すと仰ったら二度と思い出さないのです。神さまの記憶から私たちの背き、罪、咎は消え去り、二度と思い出して責めないのが神さまの赦しです。この点は私たち人間とは違います。私たちは赦しても忘れないですが、神さまはそうではありません。「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたの背きの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」(イザヤ 43:25)、「わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い出さないからだ。」(エレミヤ 31:34)とある通りです。このようにして神さまの赦しを得た者は、神さまの前に責められるものが何もないまっさらな状態になるのです。それゆえに「幸いなことよ」(1節)と告白できるわけです。

3. 罪の告白

神さまの赦しを得るために、私たちがしなければいけないことが一つあります。それが罪の告白です。誰に告白するのかと言えば、神さまに告白するのです。その後、人にもごめんなさいと謝ることが生じますが、まず神さまにごめんなさいと告白することです。「私は自分の罪をあなたに知らせ、自分の咎を隠しませんでした。私は言いました、『私の背きを主に告白しよう』と。すると、あなたは私の罪のとがめを赦してくださいました。」(5節)。

告白は自分で自分の罪を認めるということで、簡単にできそうに思いますが、いざ告白するとなるとできないものです。自分の罪を認めたくないという心理が働くからです。しかし、誰でも心の内には先にお話したような背き、罪、咎をたくさん持っています。それを隠し持っているときは苦しいのです。その苦しさが3,4節や10節に表れています。「私が黙っていたとき、私の骨は疲れきり、私は一日中うめきました。昼も夜も、御手が私の上に重くのしかかり、骨の髄さえ夏の日照りで乾ききったからです。」(3,4節)であり、「悪しき者は心の痛みが多い。」(10節)。

人は自分の罪を告白することがとても難しいです。しかし、赦しを約束してくださった神さまは、聖霊なるお方を通して私たちの心に罪の自覚と告白を与えてくださるのです。神さまは私たちを脅して強制的に罪を告白させるようなお方ではなく、私たちが自分から告白するまで静かに待っておられます。忍耐して待っておられる神さまの前に、ひと言「ごめんなさい」と告白できるなら、それが人生最大の「幸い」となるのです。

4. 救いの喜び

罪を告白して救われると、人に大きな変化が起こります。それが6～11節にある感謝と喜びです。「あなたは私の隠れ場。あなたは苦しみから私を守り、救いの歓声で私を囲んでくださいます。」(7節)、「しかし、主に信頼する者は、恵みがその人を囲んでいる。正しい者たち、主を喜び、楽しめ。すべて心の直ぐな人たちよ、喜びの声をあげよ。」(10, 11節)。

救われた人の特色は、感謝と喜びに囲まれて歩むことができるということです。詩篇 32 篇についてある牧師のコメントにこのように記されていました。「もし、罪責感、罪悪感、あるいは恨み辛みを取り囲んでいるならば、そのような人の心は痛みが多いことでしょう。その人から良いものは流れてきません。しかし、主の特別待遇の恵み、主に愛されている喜びがいつもその人を取り囲んでいるならば、その人から流れてくるものは、人をいやし、明るくし、生きる喜びを与えてくれるはずです。」

私たちは何に囲まれて生きているのか考えさせられます。責めや負い目に囲まれて生きる人生ではなく、感謝と喜びに囲まれて歩む人生を選びたいと思います。それを与えてくださったのがキリストの十字架の死でした。なぜなら、十字架はキリストが人のすべての背き、罪、咎の刑罰を代わりに背負い死んでくださったものだからです。冒頭で紹介したおじいさんは、これを85歳にして手にしたのです。十字架の赦しは今も信じる人々の内に与えられ

るものです。今日も赦しの恵みはすべての人に届けられています。それを頂いて新しい人生を踏み出しましょう。

まとめ

讚美歌に「長くも迷いし我、赦されたり、赦されたり、御神に背きし我、赦されたり、赦されたり赦されたり、罪人のかしら、十字架のいさおにより赦されたり」という歌詞があります。キリストの十字架による赦しを得て感謝と喜びの日々を歩むことができるようにお祈りします。おじいさんは晩年ではありましたが地上での約10年間を感謝と喜びの人生として過ごし、天国へと迎えられました。地上での感謝と喜びを携えて、今も天にて神さまを賛美しています。そのような人生も皆さまも歩まれることを願っています。神さまの祝福をお祈りしています。